
あの木の下で。

黒助さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの木の下で。

【Nコード】

N5436S

【作者名】

黒助さん

【あらすじ】

あの木が切られる。それは嫌だ。彼女は俺の友達で、恩人で、精霊で…。でも、どうする事も出来ない。なら―― * 短編初投稿です。なのでちょっとめちゃくちゃかもしれません。それでも学生時代と一緒に思い出したいという方はどうぞ！

(前書き)

お手柔らかに…。

昔は楽しかった。

小学生のころはおばあちゃん家の近くにある、神社の大きな木の上に登ろうと友達と危険だったけど必死になって登った。

その木があるのはこの町の大きな山の頂上にあるため、町を見渡すことが出来た。

そいつはまるで神様になったみたいで、この町が全部、俺たちの物みたいで感動したのを覚えている。

次の日に、おばあちゃんに叱られたのは当たり前で、ははは、って笑いながら顔を青くしたのを覚えている。

他の日には木の下になんかの台みたいなのが置いてあった。

それが学校の体育館のステージみたいに見えたから、俺たちはステージと呼んで、拾った木の枝を削り、刀みたいにして、そいつの上でチャンバラをしていたなあ。

次の日には、カッターナイフを無断で借りてたのがばれていて、おばあちゃんにこってり叱られたが、おじいちゃんが笑いながら許してあげなさいと言ってたのを覚えている。

他の日には木の下に机や椅子を置いてお茶会を開いて、大人の気分を味わっていたのを覚えている。

そのあと結局ステージでチャンバラをして子供に戻ったのだが、今、思うと大人の気分を味わおうっていうところで子供なんだがなあ。

次の日には机と椅子を持って出たのを叱られたのも覚えている。

悲しいこともあった。

中学生になり、新しい学校生活に馴染めにくかったがなんとか馴染めれた時の事だ。

おじいちゃんが職場で倒れ、病院に搬送されてそのままかえらぬ人となってしまった。

その顔はまるで何も食べてなかったかのように細く、目が半開きのままだったから、吐きそうになってそこから離れたのを覚えてる。少したったある日、葬式を挙げてみんなで悲しんだが、俺はあの木の下で木に話しかけていたのを覚えてる。

他の日には好きな人が出来て、告白しようかしまいか悩みに悩んで苦しんでいた時だ。

俺は町に出かけていて、その人と他の男子生徒が手をつなぎ歩いて見たのを見てしまって、俺の恋心は儚く散ったのを覚えてる。

少したったある日、俺はおばあちゃん家^ちに泊まり、あの木の下で木にそのことを話していたのを覚えてる。

他の日には親と喧嘩して家を出ていったことがあった。いわゆる反抗期とやらだ。

俺はあの木の下目指して走り、何故か友達がいてそいつも同じく家を出て行ったらしく、笑いあいながら木の下に小学生のころ隠した毛布を使つて眠ったのを覚えてる。

まあ、案の定叱られたが…。

少したったある日、あの木はそこまで大切だったことに気づき、あの木の下で木に感謝したのも覚えてる。

不思議なこともあった。

受験生になり、最初で最後の夏が来たことに不安と恐怖を覚えた

時の事だ。

おばあちゃん家^ちに友達と一緒に泊まり、勉強地獄から気分転換に友達と夜のあの木の下に行つてこのことを話した。

するとそいつはまるでこの山の、この町の、俺たちの精霊の如く緑色に光り、答えてくれてもの凄く驚いたのを覚えてる。

そんなことが起こったある日、授業の内容に追いついていられるようになつて俺たちは驚いたのを覚えてる。

他の日には、期末テストが近づいて焦つて、その日の夜に友達と内緒であの木の下に行つてこの不安をその木に話した。

したらまた俺たちの精霊の如く緑色に光り、光を分けて貰つたのを覚えてる。まるで勇気を与えるみたい……。

そんなことが起こったある日、俺たちは不思議と緊張せず、問題を解いていけたのを覚えてる。

他の日には、受験が目の前まで来たときに友達と一緒に夜のあの木の下に行つて、このことを話した。

すると今度は俺たちの精霊の如く緑色に光り、女性の姿になつて俺たちの頭に手を乗せて、微笑んでくれたのを覚えてる。

そんなことが起こったある日、受験が終わり、卒業式も終り、合格発表当日で推薦合格は出来なかったものの、一般入試には合格して泣きながら喜びあつたのを覚えてる。

高校生になつてからはこの木の下には行かなかったなあ……。

だからある日、大学に行つて離れてしまった友達と一緒に、夜のあの木の下、お酒を三人で楽しんだ。

そこで聞いたのだが、どうやら精霊の住む町で暮らし、たまにこの木から俺たちを見ていたそうだ。

そして今日、依頼でこの木を切り倒すそうだ。

神社を新しく綺麗にする、だがそれにはあの木を切り倒さなくてはならないとの事だ。

俺たちは二人で抗議したが俺たち以外は味方がいなかった。そして味方を付けるために学校でもこのことを言った。しかし誰も気にはしなかった…。

結局切られることになり、俺たちはあと二日だけこの木と会える期間を貰った。

夜になり俺たちは集まる。当然、あの木の下に。もう十二時を短い針が追い越していた。

そして今日切り倒されることを二人であの俺たちの精霊に話した。すると酷く悲しく歪んだ顔を一瞬して、涙目のまま微笑んだ。まるで何かを悟ったかのように。

俺たちは決心した。

この顔を、もっときれいな笑顔にするために…。

俺たちは顔を見合わせうなずいて、かのじよ精霊に顔を向ける。そして

『俺たちと精霊界で一緒に暮らそう。』

そう言った。

彼女は驚き、悩み、

「この世界に未練は、無い？」

と聞いてきた。どうやら人間を連れて行ってもいいらしい。

俺たちはうなずき、手を伸ばす。

彼女は嬉しそうに笑い、そして泣いた。

そして、俺たちを光が包み――

大きな原っぱの中、俺たち三人は大人なのも忘れてはしゃぎ回り、
笑いあいながら彼女の家へと向かった。

あの神社の事だ。

呪われてる木が今日普通に伐られたそうだな。
なぜ呪われてっかって？

そりゃあ、いざ伐ろうって時に死体が二つ、横たわってたからさ。
でもおらは呪われてっとは思えん。

何故かは知らんがその二人の顔は幸せそうに微笑んでいたからさ。
両親たちは悲しんでたが、その微笑みを見ると何故か、

「向こうはどう？楽しい？」

とつぶやいて微笑んでおった。

向こうとは何処か、地獄か天国か、あの世なのかそれとも他の世界か、おらは聞こうにも聞けなかった。

おらは切り倒してよかったのだろうか…。

そう言った罪悪感を感じつつ、

いつか答えが分かるだろうさ。

そう思い、今日も要らん木を切り倒す。

（後書き）

ここをこうしたらいい等がありましたらどしどし言っして下さい。お願いします。

それを参考にして、連載中のやつも頑張りたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5436s/>

あの木の下で。

2011年10月8日22時09分発行